

部落問題文芸・作品選集

第42卷

成瀬無極
大庭柯公
伊東茂光
栗須七郎

評論集

世界文庫版

部落問題文芸作品選集 第四十二卷

定価は箱帯に表示

昭和五十二年五月二十五日発行

発行者 松 本 富 夫

発行所 株式会社 世界文庫

東京都日黒区洗足二一二―一五

電話〇三(七一六)六一五一(代表)
(七一三)九二四四

振替 東京 四一七八四九八番

落丁、乱丁本はお取替えいたします。

目次

一、	糺の森	成瀬無極	1
二、	女乞食	成瀬無極	13
三、	特殊部落	成瀬無極	21
四、	所謂特殊部落	大庭柯公	33
五、	東七条 憎むべき差別	伊東茂光	41
六、	水平審判の日	栗須七郎	47

一、
糺
の
森

成瀬無極

糺の森

二十男。まだ来ない。

三十男。どうしたのだろう。

他の廿男。後片付けで忙がしいんだらう。

他の卅男。一躰引越なぞをするのが悪い。

四十男。新宅はどつちの方です。

三十男。岡崎と聞きました。

他の卅男。あすこは如何も特種部落の観がある。

二十男。鴨は清浄なものだ。

他の廿男。余りさうでも無い。川東には田中村があるし、鴨の堤の西一帯にも一部落ある。

他の卅男。いや提の西のは潔白なのだ。あれは小家者と云つてね、昔都会生活に敗れた

社会の劣敗者が寄り集まったのだ。

二十男。僕等が住むにも適当なやうだ。

.....

三十男。

特種部落の者は極く稚い者までトラホームに罹ってる。

二十男。

赤い眼をして、銅色の荒れた肌をして、どうも厭だ。京都の人は、一眼で見分けるさうです。盆踊があるとき、部落の者が踊りたさに一寸紛れ込むと、

すぐ輪を解いて中止で仕舞ふさうです。

他の廿男。

大学病院でもそんな話があつたさうです。何でも入浴のとき、一寸奇麗な内儀さんだったさうですが、一番に入つてゐると、後から来た老婆さんが大声上げて「何だ穢多の癖に人より先きへ入りくさつて、もう汚らはしうて能う入れん、湯を代へて貰はふ」と怒鳴つたので、可愛想に真赤になつて匆々上つて仕舞つたさうです。

.....

他の卅男。

吉田には昔から美人が居ない。あすこは旧時癩病患者が聚つてた処だ。

二十男。

鴨は清浄の地だ。

他の卅男。

否、こんな田舎はいけない。どうしても王城の西で無くては駄目だ。

四十男。

然しこの森は好いやうです。

他の廿男。

糺の森と葵祭が鴨の生命だ。

四十男。

一寸かう「夏の夜の夢」といったところが.....

二十男。

驢馬の頭の奴が出さうです。

三十男。

夏は涼しいでせう。この流れの音をきくばかりでも清々しさうだ。

他の廿男。

かう木の葉が落ちる時分になると夜などは冷える加減ですな。

三十男。

実際少し肌寒くなつて来た。少し炭をたさうぢやありませんか。

他の卅男。

まだ来ない。

他の廿男。

可なりもう遅いでせう。恐ろしい陰気な燈火だ。

四十男。

月は無いやうですね。星明りで比叡の頭が幽かに見えます。靄が深い夜だ

二十男。

すっかり落葉しましたね。かうずっと向うの神燈まで続く並木が奥深くて好

ござんすね。

他の廿男。

赤い鳥居は見えない。

二十男。

夏は真闇を螢が飛んで物凄かった。

四十男。

随分古い大木ばかりですね。榛でせうか。

二十男。

松や楓も交つてゐます。真中の広い処には梅が大分あります。

他の廿男。

蟬の小川の水は冷たからうな。

三十男。

どうです、一つディオニゾスの会を起しては、どうも京都では盛な会合が無くて淋い。

他の卅男。

あちらでは中々振ったことが有ましたらう。

三十男。

なに大したことも……………一駄どうも日本人は振ひませんね。日本の前大臣なんて者もあつちの劇場などで見物してゐるところを見ると実に憐れな見すばらしいものでしたよ。そこへゆくと支那人の方がえらい。中々盛んなのがゐますよ。……………

他の廿男。

この流れは湧き出るのか。

二十男。

宮の東傍から湧き出る。そこに厄除けの神が祭つてある。

他の廿男。

夏、こゝから足を水に洗はしたら涼しからう。

二十男。

漸々靄が濃くなつて来た。袖が湿つぽい。

他の廿男。

月が出たら何か踊つてゐる姿が見えるかも知れない。

二十男。

ミッドサンマーナイツドリームか。

他の廿男。

何か村芝居のやうな催しは無いか。

二十男。

盆踊りがある。然し森の中ではやらぬ。通りで輪を作つて踊る。畑へ出る姿

——一寸大原女のやうな風で手拭を蒙り、白足袋に草履や下駄を穿いて、重

他の廿男。

に村の娘が踊る。男は造花や提燈で屋根を飾った屋台へ上って歌をうたふ。

一寸待ち給へ……………今のは何だ。

二十男。

今の……………？

他の廿男。

あの……………あの音だ。

二十男。

あれは水車の音だ。

他の廿男。

水車があるのか。

二十男。

河の沿にある。

……………

三十男。

「畏」といふ小説を御覧でしたか。

他の卅男。

どうも妙なものですな。

三十男。

あれが真面目の作でせうか。

四十男。

よく兎守などが外で何か聞てきて、大変なことを云ふことがありますね。一

寸さう云った風が有りはしませんか。

……………

二十男。

オベロンはよく美しい小供の姿で出て来るのだね。

他の廿男。

エルフエンが手を取り合って踊るだらう。

二十男。

どうも森は神秘的な香ひを持つてるものだ。

他の廿男。

春日野の寂味は何とも云へ無い。馬酔木が白く咲いてたきり。外の色の花は一つも交へぬ。春の晩れだった。秋もさぞ好からう。

二十男。

馬酔木だけは鹿も除けて喰はないさうだ。喰ふと角が落ちるのだと。

他の廿男。

日本には森が少ない。

二十男。

独逸あたりに在るやうなのは一つもあるまい。

他の廿男

日本には森の香ひの滲みた文学が無い。……………

三十男。

東山の天辺に大劇場でも建てたらいいでせう、パイロイトという処が一寸似てゐますよ。

……………

二十男。

森の中でチゴイネルの群が焚火をしてゐるなんぞは、どうも牽き付けられるやうな光景だね。

他の廿男。

日に灼けた頬に赤黒く焚火が映って、一人が一生懸命に胡弓を弾いてると、一人は吞氣さうに煙草をふかしてゐる。一人は楽器を樹の枝に吊り下げたまゝ、

ぐうぐう寝入つてゐる。

二十男。

すると風がその楽器の弦に触れるのだらう。

他の廿男。

何でも何処かで見たやうな絵だね。

二十男。

絵ぢや無い詩だ。

他の廿男。

一人は歌ひ、一人は煙火をふかし、一人は寝てゐる、そして……………

二十男。

三人三様に世の中を馬鹿にしてゐるのだ。

他の廿男。

レナウの「三人のチゴイネル」だ。

二十男。

リリエンクローンの詩にもある。燃える火の傍でチゴイネルの少女が露き出しの手を高く上げて、拍子を打ちながら。ファンダンゴといふ西班牙の踊を

をどつてゐるのだ。

他の廿男。

丁度こんな夜だらう。

二十男。

いや夏の夜だ。月の光を浴びて踊てる。眼は熱く燃えて、真白い園に月の光

が映す。

他の廿男。

おゝ寒さうだ。月の光が園に沁み込んで身慄ひが出るだらう。

二十男。

悲しさうな笛の音が入り、マンドリンが忍び笑ひのやうに交る。

他の廿男。

誰だか河を渡つてこつちへ来るやうだ。橋があるのか。

二十男。

秋になると水が涸れてごろ／＼した石ばかりだ。

他の廿男。

何だか寒くなつた。もう中へ入らう。

二十男。月はまだ出ない。

.....

他の卅男。いよ／＼これは来ないと見える。

三十男。引越ですっかり疲れたのでせう。

四十男。どうですビヤ―は。

二十男。ビールも冷たい時候になりましたね。

三十男。一寸……足音がするやうだ……ね、落葉を踏む音が……？

他の卅男。成程、来たのかも知れない。

他の廿男。いや、あれは今河を渡つて来た人です。通りへ抜けるのでせう。

他の卅男。さう云へば小橋を渡つて向うへ行くやうだ。簌々音がする。

四十男。何だか寒くなりましたね。

二十男。少し風立って来たやうです。

三十男。どうです愈々来ないのならこれだけで盛んに飲まうぢやありませんか。

他の廿男。色彩に乏しいな。

他の卅男。かう丸くなって火鉢を抱へたところは少し小家者の酒宴といふ観がある。

.....

二十男。東京では我々がさも閑散であるらしく思つてると見える。

他の廿男。謡曲などを始めるからだ。

二十男。野球のチームでも作つたら活動してると褒められるかな。

三十男。謡曲は嫌ひだ。何々斎とでも改名しないうちはやらぬ。一体京都の人の骨董

癖には腹が立つ。新聞を見てもつまらぬ人の伝記などが出てゐて厭になる。
一体二宮尊徳などといふ人は一升の米を少し宛かう儉約して傍に取つてお
くと云ふ様な人ぢや無いのか。どういふ人なんです。

二十男。一体教員と詩人と兼任が出来るものか。

他の廿男。出来さうも無い。

三十男。出来ないこともあるまい。

四十男。さあね……………

他の卅男。月が出た様だ。

四十男。燈火を細めて見給へ。

三十男。成程ぼーっと明るい。

二十男。

木の葉が映る。

他の廿男。

影が揺めく。風があると見える。

二十男。

黙ってゐると流れの音ばかり聞える。

他の廿男。

水車の音も幽かにする。

他の卅男。

大分更けた。いよく来ないかな。あゝ……………欠伸が出ると身震ひがする。

二、女乞食

成瀬無極